戦争とアナキスト―ウクライナにおける反権威主義の展望

War and Anarchists: Anti-Authoritarian Perspectives in Ukraine

https://ja.crimethinc.com/2022/02/15/war-and-anarchists-anti-authoritarian-perspectives-in-ukraine?fbclid=IwAR2GXKHIarEbVUrS2vqxQJ0yyDVfDRmm4-WKqwMhfLvCfb_07sImST06cLo

2022 年 2 月 15 日

過去 9 年間にわたってウクライナで展開されてきた困難な状況について、ウクライナの様々な社会運動に参加する人々がどのようにこれを見ているのか、をこのウクライナのアナキストによって作成された文書は説明するものだ。私達は、世界の全ての人々が以下に述べられた状況とそれが突きつけている課題について取り組むことが重要であると思っている。この文書は、私達がこれまでにウクライナとロシアで出版した他の文書で述べている様々な見解との文脈のなかで読解してもらいたい。

この文書はウクライナで活動する反権威主義的な活動家数名によって共同作成されたものだ。私たち一つの組織を代表するものではないが、この文書を共に作成し、来るべき戦争への備えとした。

私たち以外に、この文書の編集には 10 人以上が加わっている。その中には、これから本文書で述べる出来事の参加者たち、私たちの主張の正確さをチェックしたジャーナリスト、ロシア、ベラルーシ、そして他の欧州地域から来たアナキストもいる。最大限、客観的な文書となるよう、私たちは多くの修正と説明の追加を受け入れた。

もし戦争が勃発するならば、反権威主義の運動が生き残れるかどうかは分からない。しかし、私たちは生き残るよう努力する。どうなるかは別として、この文書は私たちが蓄積してきた経験をオンラインで後世に残そうとする一つの試みである。

現在、世界の人々はロシア―ウクライナ戦争勃発の可能性についてあれこれと議論している。はっきりさせておきたいのだが、ロシアとウクライナの戦争はすでに 2014 年から始まっている。

だが、まず一番大事なことから始めよう。

キエフにおける「マイダン」抗議

2013 年、当時のヴィクトル・ヤヌコーヴィチ大統領が EU との協定書への署名を拒否したことに抗議する学生を警察特殊部隊（ベルクト）が殴打したことに端を発して、大衆的な抗議がウクライナで始まった。この殴打事件は、ウクライナの様々なグループに行動を起こすよう訴える呼びかけの役目を果たしたのである。ヤヌコーヴィチは一線を越えてしまっ

た、と全ての人たちが思った。抗議の結果、ついに大統領は逃亡したのである。

ウクライナではこの抗議運動は「尊厳のための革命」と呼ばれている。ロシア政府はこれをナチによるクーデター、米国務省によるプロジェクト、等と言っている。抗議運動の参加者そのものは、極右の徽章をつけた活動家、ヨーロッパの諸価値と欧州統合を掲げるリベラル指導者、政府に抗議して街頭に出てきた普通のウクライナの市民、そして、極めて少数の左翼といった種々雑多な群衆であった。参加者の間ではオリガルヒ（新興財閥）への反感が支配的ではあったが、ヤヌコーヴィチが自らの身内と在任中に大企業を独占しようとしたことに反発したオリガルヒは、抗議運動への財政的支援を行っていた。すなわち、ヤヌコーヴィチ以外のオリガルヒにとって、この抗議運動は自分たちの企業を救うチャンスだったのである。また数多くの中小企業家たちが抗議に参加した。ヤヌコーヴィチ一派は、こうした中小企業に対して賄賂を要求し、自由な企業活動を許さなかったからである。普通の市民は政府のどうしようもない腐敗と警察の暴力行為にうんざりしていた。親ロシア政治家だ、と言う理由でヤヌコーヴィチに反対していた民族主義者は、特に大きな声をあげた。ベラルーシとロシアから逃れてきた人々も抗議に加わった。なぜならヤヌコーヴィチは独裁者アレクサンドル・ルカシェンコとウラジーミル・プーチンの友人と見なされていたからである。

「マイダン」を撮ったビデオを観たことがある人は、暴力性が極めて高いことに気づかれただろう。抗議行動の参加者たちには逃げる場所がなかった。だからとことん最後まで抵抗するしかなかったのである。警察特殊部隊（ベルクト）は閃光照明弾に炸裂時に裂傷を負わせるための金属ナットを仕込み、人々の目を狙った。そのために多くの負傷者が出たのである。最後の段階では治安部隊は火器を使用し、106 人の人々を殺害した。

これに対して、デモ参加者は手製の手りゅう弾、爆弾を製造し、火器をマイダン（広場）に持ち込んだ。火炎瓶の製造はさながら小さな師団の活動のようであった。

2014 年の「マイダン」での抗議に対して、当局は傭兵(titushakas) を使い、彼らに武器を渡し、動員し、政府の忠誠部隊として利用しようとした。こん棒、ハンマー、ナイフでの傭兵とのたたかいもあった。

「マイダンは NATO と EU に操られている」という見解とは逆で、ヨーロッパ統合の支持者たちは平和的な抗議に訴えており、戦闘的な抗議行動を馬鹿にしていた。EU と米国は政府庁舎の占領を批判していた。もちろん「西欧派」勢力や組織も抗議に参加していたが、それらが全ての抗議をコントロールしていたわけではない。極右民族主義をはじめとする様々なグループが運動に活発に介入し、それぞれの主張を押しつけようとした。これらのグループが、一番最初の戦闘部隊を創出し、人々を集め、訓練し、指揮した事によって、自らの為すべきことを理解して、組織化を担う部隊となったのである。

しかしながら、どのグループも完全に全部を支配していたわけではない。その主要な傾向は、腐敗して人気のなかったヤヌコヴィチ政権に対する自然発生的な抗議だったのである。おそらく、「マイダン」は数多くの「盗まれた革命」のひとつに数えられるであろう。何万という普通の人々の犠牲と努力は、権力を握り、経済を支配した一握りの政治家たちによっ

て簒奪されてしまったのだ。

2014 年の抗議におけるアナキストの役割

ウクライナにおける無政府主義の歴史は長いのであるが、スターリン時代、いかなる形であれ無政府主義と関係をもった全ての人は抑圧され、運動は途絶えた。その結果、革命の経験の継承も途絶えたのである。それが史家たちの努力によって 1980 年代から復活し始め、2000 年代に入ってサブカルや反ファシスト闘争の発展によって大きなうねりとなった。しかし、2014 年、まだそれは深刻な歴史的課題に挑む準備は出来ていなかった。

抗議が始まる前、アナキストは個人あるいは小さなグループに分散していた。運動の組織化と革命化を主張していたのはごく少数であった。このような出来事に備えていた有名な組織の中には、マフノ・アナルコサンディカリスト革命連合（Makhno Revolutionary Confederation of Anarcho-Syndicalists）があったが、暴動の初期において組織は瓦解してしまった。メンバーたちは新しい情勢に対応した戦略を打ち出せなかったのである。

例えてみれば「マイダン」とは次のような状況であった。特殊部隊が突然家に押し入ってきて、あなたはすぐ断固とした行動に打って出なくてはならない。それなのに、あなたが手に持っているのは、パンク詩集、ヴィーガンの勧め、100 年前の古ぼけた文献、そして最良のものでも、街頭での反ファシスト戦や地域での社会闘争の経験だけだったのである。当然のことながら、何が起こっているのかを理解しようとするなかで、数多くの混乱が起こった。

当時、情勢に対する統一した見解をつくることは出来なかった。街頭行動に極右が現れたことから、多くのアナキストは抗議行動の支援に消極的だった。バリケードのなかでナチと同じ側に立ちたくはなかったのである。このことで運動の中で多くの論争が起こった。あえてファシストの抗議行動に参加したものは批判を浴びる事もあった。

抗議に参加したアナキストは、警察の暴力とヤヌコヴィチ自身とその親ロシア的な姿勢には満足できなかったが、大きな影響を与える事は出来なかった。アナキストは基本的によそ者扱いだったのである。

結果的にアナキストは「マイダン革命」には個人、あるいは小グループとして、主にボランティアあるいは非戦闘部門に関わることになった。しばらくして、アナキストは協力し合い、自身の「百人隊」（60〜100 人で構成された戦闘部隊）を創設することを決定した。しかしその部隊の登録（マイダンにおいて義務付けられた手続き）の際、少数であったアナキストは武装した極右グループによって追い散らされてしまった。アナキストは広場に留まってはいたが、もはや大きな組織を作ろうとはしなかった。

マイダンで殺害された犠牲者のなかには、アナキストの Sergei【他のソースでは Serhiy】Kemsky がいた。皮肉なことに、彼は死後、ウクライナの「英雄」として扱われている。彼は治安部隊との衝突が緊張状態を迎えたなかで狙撃された。抗議行動の最中、彼は参加者たちに対して「マイダン、聴こえるか？」と題されたアピールを発し、直接民主主義と社会変

革の側面を強調しながら、革命を発展させる方法を素描していた。そのテキストは英訳されている。

戦争の始まりークリミア併合

ロシアとの軍事衝突は、8 年前の夜、2014 年 2 月 26－27 日の夜にクリミア議事堂と閣僚庁舎が正体不明の武装集団に占拠された時から始まった。彼らはロシア製の武器、制服、装備を使用していたが、ロシア軍の徽章をつけてはいなかった。プーチンはこの作戦にロシア軍が参加していたことを認めないが、後にプロパガンダ用に製作されたドキュメンタリー『クリミア―故郷への道』のなかで個人的にはその事を認めている。

ヤヌコヴィチの時代、ウクライナ軍は極めて貧弱な状態に置かれていた事を理解する必要がある。クリミアに 22 万のロシアの正規軍が展開している事を知りながら、ウクライナの州政府はあえてそれに対峙しようとは考えなかった。

クリミア占領の後、多くの住民たちは今日まで続く抑圧下に置かれてきた。その中には私たちの同志もいる。中でも目立った事例を幾つか簡単に紹介しよう。アナキストの Alexander Kolchenko は、民主活動家の Oleg Sentsov と共に逮捕され、2014 年 5 月 16 日にロシアへ送られた。5 年後、彼らは捕虜交換によって釈放された。アナキストの Alexei Shestakovich は、拷問され、頭をビニール袋で覆われて窒息させられ、殴打され、報復するぞと脅されたが、何とか逃げ出すことが出来た。アナキストの Evgeny Karakashev は、2018 年に SNS（Vkontakte）へ投稿をリポストしたために逮捕され、今も拘留されている。

デマ情報

ロシアとの国境に近い、ロシア語が話されている町ではロシア支持のデモが行われた。デモ参加者たちは NATO、過激な民族主義者、そして、ロシア語を話す住民を対象とした弾圧を怖れていた。ソ連邦の崩壊以後、ウクライナ、ロシア、ベラルーシの家々は親族関係を結んでいた。しかし、「マイダン」はそれらの個人的な関係に深刻な亀裂を生じさせたのである。キエフ以外の地域でロシアのテレビ放送を観ていた人たちは、キエフがナチの軍事独裁に占領され、ロシア語を話す住民への弾圧が行われていると信じ込まされたのだ。

ロシアは以下のようなプロパガンダ・キャンペーンを開始した。「懲罰者」、すなわちナチスがキエフからドネツクまでやってくる。連中はロシア語を話す住民を根絶やしにしようとしている（キエフも住民の大部分はロシア語を話しているにも関わらず）。これらのデマ宣伝において、極右の写真が使われ、ありとあらゆるフェイク・ニュースが撒き散らされた。この情報戦の中であらわれた、最も悪名高きデマだったのは、戦車に子どもを括りつけて道路で引きずったという、いわゆる「三歳児の磔（はりつけ）」と言われたニュースだった。ロシアでは全国放送で流され、ネットでも拡散されたのである。

私たちの見解では、2014 年に武装衝突を引き起こす上で中心的な役割を担ったのはデマ宣伝であった。ドネツクやルガンスクの住民は殺されるかもしれないと怖れ、武器を取り、プーチンの軍隊に助けを求めたのである。

ウクライナ東部における武装衝突

「戦争の引き金が引かれた。」ロシアの FSB（連邦保安局、KGB の後継組織）大佐であったイゴール・ガーキン自身の言葉である。ガーキンはロシア帝国主義の支持者であり、親ロシア派の抗議運動を過激化させることにした。彼はロシア人の武装集団を率いて国境を越え、（2014 年 4 月 12 日）スラビャンスクの内務省ビルを占拠し、武器を接収した。親ロシア派の治安部隊がガーキンの部隊に合流し始めた。ガーキンの武装集団の一報が流れた時、ウクライナは反テロ作戦を呼びかけた。

ウクライナの人びとの一部は国家主権を守ろうと決意し、ウクライナ軍は弱体であることは知っていたから、広範な義勇兵運動を組織した。何らかの軍事的素養のある人びとが結成された義勇大隊のインストラクターとなった。人道的ボランティアとして、ウクライナ正規軍や義勇大隊に参加した者もいたのである。武器、食料、兵站、燃料、輸送、民間自動車の借り上げ、その他諸々のための資金集めが行われた。義勇大隊の方がウクライナ国軍よりも高性能の武器を所持していることもしばしばあった。これらの部隊は極めて高いレベルでの連帯と自己組織化を示し、実質的に国境防衛という国家機能を代替した。これによって（当時、きわめて貧弱な武装しかしていなかった）国軍は効果的に敵に反撃することができたのである。

親ロシア派部隊によって支配された地域は急速に後退し始めた。こうしてロシア正規軍が介入したのである。

時間的には 3 つの重要なポイントがあった。

1．ウクライナ軍は武器、義勇兵、軍事スペシャリストがロシアから来ていると認識し、それ故に 2014 年 7 月 12 日にロシア・ウクライナ国境での作戦を開始した。しかし、ウクライナ軍は行軍中にロシア軍砲兵隊から攻撃を受け、作戦は失敗した。ウクライナ軍は甚大な被害を被った。

2．ウクライナ軍はドネツクを占拠しようと試みた。軍は前進したが、ロヴァイスク近郊でロシア正規軍によって包囲されてしまった。私たちの知人たちも、この時、義勇大隊に参加しており、捕虜となりロシア軍を直接見ているが、三か月後、戦争捕虜の交換によって釈放された。

3．ウクライナ軍は Debaltseve 市を支配したが,、ここには重要な鉄道の連絡駅がある。これによって、ドネツク・ルガンスク間の直接の交通が遮断されていたのである。ポロシェンコ（当時のウクライナ大統領）とプーチンの交渉―長期休戦協定の締結に向けた交渉が始まるだろうと考えられていた―が予定されていた前夜、ウクライナ軍陣地が、ロシア軍に支援

された部隊によって攻撃された。ウクライナ軍は再び包囲され、甚大な被害を被った。

当面の間（2022 年 2 月現在）、ロシアとウクライナは休戦および、条件つきでの「平和と平穏」秩序の維持に合意している。それは継続的に侵犯されているが、維持はされている。毎月、何人かの人々が殺されてはいるが。

ウクライナ政府の支配が及ばない地域について、ロシアはロシア正規軍が駐留し、武器を提供していることを否定している。ロシア兵でウクライナ側の捕虜となった者たちは、演習の警戒態勢だと言われていたが、派遣先に着いたところではじめてウクライナでの戦闘の只中にいる事が分かった、と言っている。国境を越える前に軍の徽章は外しているが、これはクリミアでもロシア軍は同じことをしている。ロシアでジャーナリストは（ウクライナで）戦死した兵士たちの墓地を発見しているが、その戦死情報は明らかにされていない。墓石にはただ、2014 年に死亡、としか刻まれていない。

未承認の「人民共和国」の支持者たち

「マイダン革命」に反対する者たちのイデオロギーも様々である。最も広く支持されている考えは、警察に対する暴力行為やキエフでの暴動は良くなかったというものである。ロシア文化的な物の見方、映画、音楽の中で育った人びとは、ロシア語の排斥を怖れていた。ソ連邦とその第二次大戦での勝利を信奉していた人びとは、ウクライナはロシアの同盟国であるべきだと考え、過激な民族主義者たちの台頭を快く思っていなかった。ロシア帝国の崇拝者たちは、「マイダン」をロシア帝国領土への脅威と見なした。これらの反対派の思想は、ソ連邦の鎌とハンマー、ロシア帝国の旗、そして第二次大戦での勝利の象徴だった聖ジョージリボンの三つの旗が一つになって写っているこの写真に示されている。私たちの見るところでは、これらの人びとは権威主義的な保守派であり、旧秩序の支持者だと言えるだろう。

親ロシア派を形成しているのは、警察、企業家、政治家、ロシア支持派の軍人、フェイクニュースに怯えた一般市民、ロシア愛国主義や様々な君主制主義者を含む極右の活動家、ロシア帝国主義者、ロシアのネオナチ傭兵部隊「Rusich」、ロシアの民間軍事会社ワグナー・グループ、その中には悪名高いネオナチの Alexei Milchakov、ロシア排外主義的ナショナリスト・メディア「スプートニク＆ポグロム 【破壊―ロシア語でユダヤ人迫害を指す】」の創設者で最近死亡した Egor Prosvirnin などがいる。また、ソ連ンとその第二次大戦での勝利を信奉する左翼権威主義者たちも、その一部である。

ウクライナにおける極右勢力の台頭

先に述べたように、「マイダン」の過程で右翼は戦闘部隊を組織し、警察特殊部隊「ベルクト」と物理的に対峙できた事で支持を獲得した。武装していたことによって右翼は独立性を維持し、他の勢力に右翼の動向を考慮する事を強いる事ができたのである。あからさまな

ファシストの徽章―ナチの鍵十字、ウルフ・フック、ケルト十字、突撃隊ロゴーの使用にも関わらず、ヤヌコヴィチ政権の部隊と戦わなければならない、という必要から多くのウクライナの人びとが右翼との共闘を求めた事から、彼らの事を悪く言う事はできなかった。

「マイダン」の後、右翼は親ロシア派のデモを積極的に弾圧し始めた。軍事作戦が開始されると右翼は義勇大隊を組織し始めた。中でも有名なのは「アゾフ大隊」である。最初は 70 人の部隊だったのが、今では 800 人の兵員、自前の武装車両、砲兵隊、戦車中隊、そして部隊とは別に、NATO 軍の制式に準拠した下士官学校を保有している。アゾフ大隊はウクライナ軍のなかで、最も戦闘能力に秀でた部隊である。それ以外にも、ウクライナ義勇部隊「右派セクター」や「ウクライナ民族主義者機構」などのファシスト軍事組織があるが、アゾフ大隊ほどには広くは知られていない。

その結果、ロシアのメディアではウクライナの右翼に対する悪評が高まった。しかしながら、多くのウクライナの人びとは、ロシアで憎悪されているのはウクライナでの闘いの象徴であると考えたのである。例えばロシアではまずもってナチスの協力者であるとして知られているウクライナ民族主義者ステパン・バンデラの名を抗議参加者たちはよく、まがい物の形で使った。「ユダヤ―バンデラ主義者」などと名乗り、ユダヤ・フリーメーソン陰謀論者を「煽った」者もいたのである。

時が経つにつれて、こうした「煽り」が極右の活動の台頭を招いた。右翼は公然とナチの徽章を身につけるようになった。「マイダン」の普通の支持者たちが、自分は「バンデラ主義者」であると名乗って、ロシアの子どもを喰っているとか、そんなミームをネットに上げるようになった。極右がこうして社会のメインストリームに出てきたのだ。極右は、テレビに出演し、民間メディアに登場して「愛国者」「民族主義者」として紹介された。リベラル派の支持者は、「ナチ」などロシアのメディアのでっち上げだと考えて極右の味方をした。2014 年から 2016 年にかけては、ナチだろうが、アナキストだろうが、犯罪組織のボスだろうが、あるいは、何の公約も果たしたことがない政治家であろうが、闘いに加わろうとするものは誰でも受け入れられたのである。

極右が台頭したのは、彼らが決定的な状況下において、他の勢力より組織化されており、効果的な戦闘技術を他の勢力に教えることができたからである。ベラルーシではアナキストが似たような役を果たして、大衆の支持を獲得することが出来たのだが、ウクライナにおける極右ほどの大きな影響は持てなかった。

2017 年までに休戦協定が発効し、過激な戦闘員の必要性が低下すると、ウクライナ保安庁（SBU）と政府は右翼を引き入れるために、右翼のなかでも「反システム」的な立場や、右翼運動の発展について独立した立場を取っていた者たち全てを投獄し、あるいは中立化させた。その中には、Oleksandr Muzychko、Oleg Muzhchil、Yaroslav Babich などの人びとがいた。

今日、右翼は依然として大きな運動であるが、その人気は過去に比べて低下しており、右翼指導者たちは保安庁、警察、政治家と結びついている。彼らは独立した政治勢力ではなく

なっている。極右の問題は民主主義派の内部では頻繁に議論されるようになっている。人びとは右翼が関わるシンボルや組織についての理解を深めつつあり、それについては黙して語らない、という態度は取らなくなっている。

戦時下におけるアナキストおよび反ファシストの活動

軍事作戦が開始されると共に、親ウクライナ派といわゆる「人民共和国」(「ドネツク人民共和国」と「ルハンスク人民共和喰国」）派との分断が明らかになってきた。戦争の初期においてパンクスの間では「戦争反対」の声が広がったが、それも長くは続かなかった。それぞれの陣営について分析してみよう。

親ウクライナ派

大規模な組織が無かったことから、初期のアナキストおよび反ファシスト義勇兵は、戦闘員、医療班、ボランティアとして個人的に参戦した。独自の分隊を作ろうとは試みたが、知識とリソースの不足から上手くいかなかった。中にはアゾフ大隊やウクライナ民族主義者機構に加わった者すらもいた。その理由はありふれたもので、一番参加しやすい部隊に入ったのである。その結果、右翼に転向していった者もいた。

【編集者注：私たちはこれらの出来事について詳細を知っている訳ではない—そして、文書の作成者たちは今、全面戦争の只中にあって事実を確認することも難しい—が、ファシストが組織した民兵組織に加わった反ファシストとか「アナキスト」とは、そもそもの最初から本当のアナキストでは無かった事は明白である。私たちはこのパラグラフを削除せずに原文通りに残すが、それは批判的である事が重要であると同時に、これらの出来事の只中にいる人びとの声が中心に置かれる事が重要だと考えるからである。】

戦闘に参加しなかった人びとは、東部での負傷者のリハビリや前線近くにある幼稚園に防空シェルターを作るための資金を集めた。ハリコフには「自律」という名の占拠空間—開放されたアナキストの社会文化センター—があり、当時は避難民支援に力を集中していた。センターは住居を提供し、常設の本当の「フリーマーケット」【無償の物資配布】を行い、避難民たちの相談に乗り、社会資源を紹介したり、教育活動を行っていた。加えてセンターは理論的な議論の場でもあった。不幸にして、2018 年にセンターは活動を停止した。

これらの活動は全て特定の人びとやグループによる個別的な取り組みであって、統一的な戦略の枠組みというものは無かったのである。

この時期の最も重要な出来事は、Autonomnyi Opir（自律的抵抗）という、以前には大きかったラジカルな民族主義組織が発足したことである。Autonomnyi Opir（AO）は 2012 年

から左翼的傾向を強めていた。2014 年までには左傾化は一層強まり、「アナキスト」を名乗るメンバーさえもいた。AO は自らの民族主義を「自由」のための闘争であり、ロシア・ナショナリズムへの釣り合いを取るものとして位置づけ、サパティスタやクルドをロール・モデルとしていた。ウクライナにおける他の社会勢力と比較した時、AO は最も近い同盟者だと考えられたため、アナキストのなかには AO と共闘する者もいたが、そうした共闘、あるいは AO の組織そのものを批判する者もあった。また AO のメンバーは義勇大隊に積極的に参加し、軍内部で「反帝国主義」という考えを広げようとしていた。AO はまた女性の戦争に参加する権利を支持しており、AO の女性メンバーたちは戦闘に加わった。AO は戦闘員や医師の訓練センターを援助し、軍のボランティアとして活動し、リヴィゥで避難民を受け入れる社会センター「Citadel（城塞）」を運営していた。

親ロシア派

現代のロシア帝国主義は、ロシアはソ連邦の継承者である、という捉え方の上に成り立っているが、それは政治システムではなくて、領土の話なのである。プーチンは第二次大戦におけるソ連の勝利をナチズムに対するイデオロギー的勝利とは考えておらず、ロシアの力を見せつけたヨーロッパに対する勝利である、と見なしている。ロシアとそれに支配された国々では、人びとの情報へのアクセスは他国よりも制限されており、プーチンは複雑な政治問題についてのプロパガンダにも苦労はしない。その語り口は基本的には以下のようなものである。「米国とヨーロッパはかつて強力なソ連を怖れていた。ロシアはそのソ連の継承者であり、ゆえに旧ソ連の領土はすべてロシアのものなのだ。ロシアの戦車はかつてベルリンに進軍した。われわれは「また犯（や）ってやろうじゃないか」そして、NATO に誰が一番強いのか見せつけてやるのだ。ヨーロッパは今や『腐って』いる。なぜなら同性愛者や移民どもが好き放題やってるからだ。」

左翼における親ロシア派のイデオロギー的基盤は、ソ連とその第二次大戦での勝利のレガシーである。ロシアがキエフの政庁がナチとその軍政によって占領されたと主張した時、「マイダン」に反対した者たちは、自らをキエフに軍政を敷いたファシズムと戦う戦士だと見なしたのである。こうしたレッテル貼りは、権威主義的左翼―例えばウクライナにおける Borotba（闘争）」をはじめとした組織―の間で共感を誘った。2014 年の最も重大な時期に、Borotba は最初はウクライナ政府に忠誠を誓っていたが、後に親ロシア派に転じた。2014 年 5 月 2 日、オデッサにおいて Borotba のメンバー数名が街頭での暴動の中で殺害された。ドネツクとルガンスクでの戦闘に参加し、そこで死亡したメンバーもいた。

Borotba は自らの闘いの動機はファシズムに反対する闘争であると言い、ヨーロッパの左翼へ「ドネツク人民共和国」と「ルハンスク人民共和国」に連帯するよう呼びかけた。プーチンの政治参謀であるウラジスラフ・スルコフの E メールがハッキングされたことにより、Borotba のメンバーは、スルコフの配下から資金供与と指導を受けていたことが暴露さ

れた。

ロシアの権威主義的共産主義者も、同じような理由から分離した二つの共和国を受け入れている。

「マイダン」に極右支持者が参加していたことから、「非政治的」な反ファシストたちも「人民共和国」を支持した。ここでもドネツクとルガンスクでの戦闘に参加して死亡した者もいた。

ウクライナには「非政治的」な反ファシストが存在する。その結びつきはサブカル的なものであり、ファシズムに対して否定的であるが、その理由は「爺ちゃんがファシストと戦ったから」といったものである。ファシズムについての理解は抽象的で、政治的には一貫性が無いことが多く、性差別主義者、同性愛嫌悪、ロシア愛国主義者などであったりもする。

いわゆる「人民共和国」擁護の立場は、ヨーロッパの左翼の間では広い支持を獲得した。最も有名なのはイタリアのバンド「バンダ・バソッティ」とドイツの政党「左翼党」であろう。資金集めだけではなく、「バンダ・バソッティ」は人民共和国の支配地域、いわゆる「ノヴォロシア（新ロシア）人民共和国」へのツアーも敢行した。「左翼党」は欧州議会において、あらゆる可能な方法で親ロシア的な見方を支持し、親ロシア活動家とのビデオ会議を主催し、クリミアや未承認の「人民共和国」を訪問した。「左翼党」の若いメンバーと「ローザ・ルクセンブルク財団」(「左翼党」の財団である）は、この立場は全ての党員に共有されているわけではない、と主張したが、ザーラ・ヴァーゲンクネヒトやセヴィム・ダグデレンのような主要党員は親ロシア的な主張を広めている。

アナキストの間では親ロシア的な立場は人気がない。個人的な見解のなかで目立っていたのは、米国から来た総合格闘家でアナキストのシンボルをタトゥーにしている Jeff Monson だろう。彼は以前にはアナキストを自称していたが、ロシアにおいては、彼は与党「統一ロシア」と公然と行動を共にし、議員を務めている。

左翼「親ロシア」派とは一言でまとめれば、ロシア特務機関の活動とイデオロギー的無能さの産物である。クリミア占領後、ロシア連邦保安局員は、現地の反ファシストやアナキストと接触し、活動継続を許可するかわりに、これ以降はクリミアはロシア領であるべきだという主張をアジテーションの中に入れるよう持ちかけた。ウクライナにおいては、反ファシストを自称する活動家グループや宣伝組織は小さなもので、基本的には親ロシア的団体である。多くの人はこれらの団体はロシアのために活動しているのではないか、と疑っている。こうした団体のウクライナでの影響力は小さいが、そのメンバーはロシアのプロパガンダ機関に対する「密告者」の役割を果たしている。

その他にもロシア大使館や Ilya Kiva のような親ロシア派議員からの働きかけがあり、アゾフ大隊のようなナチに対して否定的な態度を取るよう促し、人びとに立場を変えるよう資金提供を申し出ている。現在までのところ、こうした筋から金を受け取ったという事を公に認めたのは　Rita Bondar だけである。彼女は以前は左翼・アナキスト団体に寄稿していたが、金の必要に迫られ、ロシアのプロパガンダで有名な Dmitry Kiselev のメディアに匿

名で書くようになった。

ロシア自体にあっては、アナキスト運動は撲滅されつつあり、反ファシストのサブカルからアナキストを放逐しつつある権威主義的共産主義者が台頭している。近年の出来事でその事を最もよく示していたのは、2021 年の「ソ連軍兵士を偲ぶ反ファシスト大会」の開催であった。

ロシアとの全面戦争の脅威はあるか？アナキストの立場

10 年ほど前であれば、ヨーロッパでの全面戦争などという考えはとんでもないものに思われたであろう。なぜなら 21 世紀の安定したヨーロッパの諸国家は「ヒューマニズム」を強調しているし、悪事は公然とは行わない。仮に軍事作戦に関与する場合でも、それはヨーロッパからは遠く離れた地域で、である。しかしながら、ロシアに関して言えば、私たちは、クリミア占領とそれに続く似非「住民投票」、ドンバスでの戦争、MH17 旅客機の撃墜を目撃してきた。ウクライナは政府省庁だけではなく、学校や幼稚園の中に居てさえも、常にハッカーの攻撃や爆撃の脅威に晒されてきたのである。

2020 年、ベラルーシにおいて、ルカシェンコは 80%の得票を獲得したと称して、選挙での勝利を大胆にも宣言した。ベラルーシでは蜂起が起こり、政府側のプロパガンダに従事していた者たちまでもが離反するに至ったが、ロシアの連邦保安庁がベラルーシ入りすると情勢は劇的に変わり、ベラルーシ政府は抗議行動を暴力的に鎮圧することに成功したのである。

同様のシナリオはカザフスタンでも演じられた。しかし、カザフスタンにおいては、ロシア、ベラルーシ、アルメニア、カザフスタンの正規軍が CSTO（集団安全保障機構条約）下での協力の形で、政権による反乱鎮圧を支援するために派兵された。

ロシアの特務機関は、ベラルーシと EU の国境で紛争を引き起こすためにシリア難民をベラルーシに誘導した。ロシア連邦保安庁は、「ノビチョク」の名で知られる神経剤（化学兵器）を使用した暗殺に従事している事が暴露された。セルゲイ・スクリパルやアレクセイ・ナワリヌイ【未遂】に加えて、多くの政治活動家がロシアで暗殺されている。プーチン政権は、こうした非難に対しては「暗殺は我々によるものではない。すべてが嘘だ。」と主張している。その一方、プーチン自身、半年前に自らの手による文書の中で、ロシア人とウクライナ人は一つの民族であり、一体化すべきであると主張している。ウラジスラフ・スルコフ（プーチン政権の政治参謀であり、ロシアの国家政策を策定し、「人民共和国」の傀儡政権ともつながりがある）は、ある公にした文書のなかで「帝国は拡張か、さもなくば滅亡か、である」と宣言している。過去 2 年の間、ロシア、ベラルーシ、カザフスタンにおいて抵抗運動は残虐に鎮圧され、独立した反政府系メディアは潰されてきた。ロシアのこうした活動については、こちらの文書を参照していただきたい。【ここでは訳出していない】

こうした全てを考慮すると全面戦争勃発の可能性は高い―昨年よりも今年になり一層高

まっている―と思われる。それがいったい、いつ始まるかは、優秀な分析家でも正確に示すことは難しい。おそらく緊張緩和をもたらし得るのはロシアにおける革命であろう。が、先述したようにロシアにおける抵抗運動は抑え込まれている。

ウクライナ、ベラルーシ、ロシアにおけるアナキストは、ほとんどがウクライナの独立をハッキリと、あるいは暗黙の裡に支持している。ウクライナは確かに熱狂的民族主義、政府の腐敗、多くのナチ組織といった問題を抱えているが、ロシアおよびそれに支配された国々と比較すれば、まだしも自由の島のように思われる。旧ソ連圏としては「例外的なこと」に、ウクライナでは、大統領の交替が起こり、議会は名目だけではない権力を有し、平和的な集会の自由も存在する。ウクライナでは社会からの注目も考慮して、裁判所が公開された手続きに従って機能する場合すらあるのである。こうした事がロシアよりはマシだ、というのは何も目新しい主張ではない。バクーニンも書いている。「もっとも不完全な共和制であっても、もっとも開明的な君主制より千倍も良いものだ、とわれわれは確信している。」

ウクライナには多くの問題がある。しかし、これらの問題はロシアによる介入なしに解決されるべきである。

侵略戦争が起こった時、ロシア軍部隊と戦うべきであろうか？私たちは「Yes」と確信している。ウクライナのアナキストにとって、現時点で考えられる選択肢は、ウクライナ正規軍への参加、地域での自衛戦、パルチザン戦闘、義勇兵としての参戦である。

ウクライナは現在、ロシア帝国主義との闘いの最前線にある。ロシアにはヨーロッパにおける民主主義の破壊をめざす長期計画がある。これまでそのヨーロッパにおける危険性については殆ど注意が払われてこなかった。しかし、これまでの主だった政治家たち、極右団体、権威主義的共産主義者たちの主張を追っていくと、すでにヨーロッパには広範な諜報ネットワークが形成されていることに気づくであろう。例えばヨーロッパの高官（ゲアハルト・シュレーダー【元独首相】やフランソワ・フィヨン【元仏首相】）たちは、退職後にロシアの石油会社での役職を提供されている。

私たちは「戦争反対」とか「これは帝国同士の戦争」といったスローガンは、効果的でないし、大衆迎合的なものだと考える。アナキストの運動は、これまでの戦争に至る過程に何の影響も及ぼすことが出来なかった。つまり、こうしたスローガンでは、、何も現実を変える事ができないのである。

私たちの立場は、次のような事実に基づくものだ。私たちは逃げ出したくない。私たちは捕虜になりたくない。私たちは戦わずして殺されたくない。アフガニスタンで起こった事を見れば、「戦争反対」が何を意味するか分かるであろう。タリバンが首都へ入った時、人びとは一斉に逃げ出し、空港で混乱のなかで死んでいった。逃げなかった者は追放された。これは今、クリミアで起こっていることだし、ロシアによる侵略が起こればウクライナの各地で同じ事が起こるのは想像に難くない。

NATO に対しては、この文書の作成者たちは二つの立場に分かれている。現情勢において、NATO に好意的な立場を取る者たちがいる。ウクライナが単独でロシアに対抗するこ

とが出来ないのは自明である。巨大な義勇兵運動を考慮したとしても、最新のテクノロジーと武器とが必要である。NATO 以外にはウクライナにこのような支援を行える同盟者はいない。

私たちはシリアにおけるクルド人のことを考える。シリアのクルド人はイスラム国との戦争において NATO に協力せざるを得なかった。そうしなければ、逃亡するか殺されるか、のどちらかであっただろう。私たちは、西側諸国がプーチンとの間に別の利益を見出すか、あるいは交渉の末に妥協に至った場合、NATO が速やかに支援を停止する事はわかっている。今日においても、クルド自治区は他にはこれといった選択肢がない事を知りながら、シリアのアサド政権と協力することを強いられている。

ロシアの侵略が起これば、ウクライナの人びとはモスクワと戦う同盟者を求めざるを得ない。ソーシャル・メディアではなく、現実世界での話である。アナキストには、ウクライナでもどこでも、プーチン政権の侵略に効果的に反撃するための十分なリソースがない。それゆえに NATO からの支援を受け入れる事を考慮せざるを得ない。

この文章の起草者たちのなかで、上記とは見解を異にする者たちは、NATO も EU もウクライナにおける影響力を強める事でウクライナで現代の「剥き出しの資本主義」システムをうち固めようとしており、それによって社会革命の可能性は遠ざかるだろう、と考える。グローバル資本主義のシステムにおいて、その旗頭は NATO の盟主としての米国であり、ウクライナは低賃金労働力と安価な資源の供給先としての底辺のフロンティアにされてしまう。従って、ウクライナ社会にとって重要なことはあらゆる帝国主義から独立する必要を認識する事だ。国の防衛能力という点では、強調されるべきは NATO のテクノロジーと正規軍への援助の重要性ではなく、社会の草の根のゲリラ戦での抵抗能力である。

【どちらの立場に立つにせよ】私たちはこの戦争はまず第一にプーチンとその支配下にある体制との闘いだと考える。独裁の下で暮らしたくない、というごく当たり前の動機に加え、ウクライナは旧ソ連圏にあっては最も活発で、自律的で反抗的な社会であり、闘う力を秘めている。過去 30 年間にわたる人民の抵抗の長い歴史がその事を確固として示している。私たちはウクライナは直接民主主義という考えに肥沃な土壌を提供するだろう、という希望を抱いている。

ウクライナにおけるアナキストの現状と新たな課題

「マイダン」においてよそ者としてのポジションに甘んじた事、そしてその後の戦争によってアナキストの運動は混乱状態にあった。ロシアのプロパガンダが「反ファシズム」というコールを独り占めしたことで、人びとの間でのアナキズムの組織化と宣伝は難しくなった。また親ロシア派の活動家達が旧ソ連のシンボルを用いた事から、「共産主義（コミュニズム）」という言葉への人びとの態度は極度に否定的なものとなった。だから「アナルコ・コミュニズム（無政府主義的共産主義）」という言葉すら拒否されるようになった。ウクラ

イナ派極右を批判するアナキストの声明を見て、一般の人びとはアナキストに疑いの目を向けるようになった。集会やデモでは、アナキストや反ファシストが自分達の旗や横断幕などを出さなければ、極右はアナキストを襲撃はしないという暗黙の合意があった。右翼は多くの武器を所持していた。こうした状況下で運動には挫折感が漂っていた。警察は機能しておらず、人びとは簡単に殺害されて、後には何の捜査もなされなかった。例えば、2015 年には、親ロシア派活動家だった Oles Buzina が殺されている。

こうしたこと全てによって、アナキストは、より真剣に事態に向き合うようになった。

2016 年からラジカルな非公然運動が発展し、その宣伝が開始された。かつてのような火炎瓶製造の事しか述べていなかったような物ではなく、武器の入手方法、資金の調達について解説する宣伝物が現れた。

アナキストの間では次第に武器の合法的な所持が受け入れられるようになった。火器を使用したアナキストの訓練キャンプのビデオも現れた。

こうした変化はロシアやベラルーシにも波及した。ロシアにおいては、連邦保安局は、合法的な武器を所持し、模擬戦闘訓練を行っていたアナキスト・グループのネットワークを摘発した。逮捕された者は電気拷問を受けて「テロリスト」の自白を強要され、6 年から 18 年にわたる刑に処せられた。ベラルーシにおいては、2020 年の抗議運動の際、Black Flag（黒旗）というアナキストの反乱グループがベラルーシとウクライナ国境を越えようとして逮捕された。Black Flag は火器と手りゅう弾で武装しており、Igor Olinevich の証言によるとキエフに武器を運んでいた。

アナキストは資金調達の問題についても、かつてのようなやり方はやめた。昔は多くの者は「被抑圧人民と同じような生活をする」と言って、低賃金の仕事に従事していた。今では多くの者が高い賃金の仕事に就こうとしており、多くは IT 産業で働いている。

街頭での反ファシスト戦も再開され、ナチの襲撃があった時には反撃が行われるようになった。その他にも、アンティファ（反ファシスト）の「No Surrender（降伏はしない）」大会が開催され、キエフでのアンティファ・グループの結成を告げたビデオ「Hoods（ならず者）」がリリースされた（英語字幕版あり）。

ウクライナにおける反ファシスト戦は重要である。なぜならウクライナには元より多くの極右活動家がいるが、それらに加えてロシア（Sergei Korotkikh や Alexei Levkin）、他のヨーロッパ地域（ Denis “White Rex” Kapustin ら）、そして米国（Robert Rando）からさえも、多くの悪名高いナチどもがウクライナに本拠を移しているからである。アナキストは極右の活動を調査している。

多くの活動家グループ（古典的なアナキスト、クイア・アナキスト、アナルコ・フェミニスト、「Food Not Bombs（爆弾ではなく食べ物を）」グループ、環境問題に取り組む団体、その他）と並んで、小さな情報プラットフォームがいくつもある。最近ではメッセージアプリ Telegram に政治的な反ファシストのアカウント（@uantifa）がつくられて、英語でも出版物を配信している。

今日では異なるグループ間の対立は次第に解消され、社会闘争のなかでは多くの共同行動や共同参加が取り組まれてきている。中でも大規模だったのは、ベラルーシのアナキスト、Aleksey Bolenkov の強制送還に反対するキャンペーン（特務機関に対する裁判闘争では勝利し、ウクライナへの在留が認められた）と、キエフのポジール地区における警察と極右の襲撃に対する防衛戦であった。

私たちの社会への影響力は未だ全体としては小さい。それは主要には、私たちが長い間、組織やアナキスト間の連携の必要性という考えをまさに否定してきたからである（かつてウクライナのアナキスト革命家、ネストル・マフノも敗北の後に同じ不満を述べていた。）アナキスト・グループは、ウクライナ保安庁、あるいは極右によって、あっという間に粉砕されてしまったのだ。

今日、私たちは停滞を脱し、前進を始めている。であるが故に、ウクライナ保安庁は運動への統制を図るため新たな弾圧を試みるであろう。

現段階において、私たちの役割は民主主義派の中で最もラジカルなアプローチと見解を提起することである。警察や極右の襲撃の際、リベラル派が警察に抗議することを選ぶなら、アナキストは同じ問題に苦しむ他のグループと協力し、襲撃に備えて組織や集会を防衛せねばならない。

アナキストは現在、人びとの共通の利害に基づいて、コミュニティが自衛を含む自らのニーズに取り組めるような、草の根の水平的な繋がりを社会に創り出そうとしている。これは、これまでのウクライナでの政治の在り方とは決定的に異なるものだ。これまで人びとは、団体、その代表たち、警察のまわりに集まるように言われ、団体や代表はしばしば買収され、その周りに集まっていた人びとは裏切られたのである。例えば、警察は LGBT の集会は警備してくれるかもしれないが、もし、その集会参加者が警察の暴力に反対する暴動に加われば牙を剥いてくるのだ。こうした事から、私たちは現実に自らの理念に希望を抱いている、が、もしも戦争が勃発するなら、再び最も主要なものは、武装闘争に参加する能力の問題となるであろう。

（翻訳：新山　力）